

児童雑誌『日曜世界 コドモノトモ』へのアプローチ

—青山学院所蔵6誌の目次と解題—

An Approach to the Children's Magazine "Nichiyō-Sekai Kodomo no Tomo (Sunday World, the Friend of Children)"; The Bibliography and the Table of Contents of Six Magazines in the Collection of Aoyama Gakuin.

山本美紀
(Miki YAMAMOTO)

1. はじめに

1-1. 『日曜世界 コドモノトモ』について

『日曜世界 コドモノトモ』（以下、『日曜世界』）は、当時（1907年）、日本自由メソヂスト教団教牧師であった西阪保治（1883-1970）によって始められた、児童伝道のための雑誌である。後に発展し、『日曜世界』は日曜世界社となって、子供を対象とするだけでなく、キリスト教に関わる書籍やグッズ販売を手広く扱う出版社に成長する。

本稿では、現存する『日曜世界』にアプローチするにあたり、青山学院資料室所蔵の刊の目次を整理し、各刊に見られる特徴を分析する。というのも、児童文化研究者の上笙一郎は「『日曜世界』、誰か本気で研究に取り組む人はいないか」¹というが、西阪と『日曜世界』の功績は大きくとも、肝心の雑誌が各地に分散している上に、創刊から最終刊までの欠本が多く、全容解明に乗り出すにはかなり厳しい状況であるためだ。筆者自身、日本自由メソヂストの後継である日本フリーメソジストの関係者や、各地のミッション系学校や西阪の遺族に問合せてみたものの、これまでにはかばかしい進展はない。もともとは、青年牧師の苦心の末の児童向けトラクトが始まりであり、さらに「子供向けの雑誌」が丁寧に保管されていることもそれ程ないだろう。何より、日曜世界社のあった大阪天王寺も、各地のミッション系学校も空襲にあっており、残っていることの方が奇跡と言えよう。

焦燥感ばかり募って時間だけが過ぎていく中、青山学院大学図書館にも『日曜世界』の数誌が所蔵されており、さらに、所蔵6誌のうち5誌は青山学院にのみ所蔵が確認できるものであることがわかった。そこで、『日曜世界』研究に着手するにあたり、まずこれら所蔵分の目次を作成し、本誌の特徴や変化の様子を断片的にでもつかむことから始めることにした。そのため、本稿は、『日曜世界』出版の背景と共に、目次から確認できる本誌の特徴・ミッションについて明らかにすることを目指し、『日曜世界』研究のスタートとするものである。

1-2. 西阪保治と創刊の背景

西阪については、上笙一郎『『日曜世界』と子ども讃美歌（上）』にコンパクトにまとめられている。それによると、西阪は大阪府河内郡庭窪村（現門真市）に生れ、家の没落によって丁稚奉公に出るが、通信教育で大阪中央郵便局の通信技師として勤めるようになった。その後、アメリカから派遣された日本人宣教師であり、日本において自由メソヂストの草創期を支えた河辺貞吉牧師と出会い、20歳の時に受洗する。現在の大阪キリスト教短期大学の前進である大阪伝道館の一期生として学び、伝道者として福良教会に派遣された。²

西阪は、『日曜世界』発刊のいきさつについて、『日本キリスト教出版史夜話』『日曜世界社とその時代』³の中で、伝道開始当初の苦悩と共に触れている。1907年、24歳で初めての任命⁴で淡路島福良の地に赴任した西阪は、毎週の礼拝出席が数名、日曜学校に子供も集まらないという状況に、2ヶ月でほとんど音を上げかけていた。しかし、相談した信徒に懇願され、気を取り直してトラクト伝道を始める。⁵そのうち子供にもトラクトを、と思い立ったが適当なものがなく、やむなく信徒の一人に言って、童話と懸賞付き考え物（クイズ）で構成された子供用のチラシを作ってもらった。⁶これが、『日曜世界』の起源であると考えられる。後に見るが、童話（読物）とクイズは、『日曜世界』に継承されているからだ。

店先に取り付けた解答紙の受取り箱には、初回20枚の解答が寄せられ、正解者の名前と商品を渡す日時を張り紙すると、回を重ねるごとに日曜学校にも子供が集まり始めた。しかし、人が多く集まることで家が傷むのを嫌った大家からその年の年末に転居を強いられ、転居後に迎えた赴任初めてのクリスマスで子供たちに配られたのが、『日曜世界』創刊号であった。

西阪は、当時の様子を、以下のように回想する。

〔クリスマスの〕喜びを胸にだいて、いそいそとくらい夜道を町の方へ帰って行く子供たちの手に握られていたのは、『日曜世界』の創刊号であった。思いがけない突然の移転、クリスマスの準備、その匆忙の間に、約一年間に時々新聞に挟んだ謄写版刷のビラは、『日曜世界』となって呱呱の声をあげたわけである。菊判（A5版）三六ページ、表紙二色刷、挿絵入り、定価二銭 一九〇七年（明示四〇年）一二月二五日発行。

（西阪保治「Ⅱ 日曜世界社とその時代」pp.39-40）

西阪のこの回想からは、創刊号がそれまでに新聞折り込みチラシとして作成したものを集めて1冊にまとめたものであったことが、また、その後に続く書誌項目の記録からは、児童用トラクトとして定価を付けて初めから販売した、ということが分かるのである。さらに西阪は、発刊にあたり、次のように『日曜世界』を評している。

日曜世界は花にすればすみれ、鳥にすれば雀、人にすれば子供のようないたってあどけない雑

誌です。いつもにこにこ笑って、面白く歌って、楽しく踊って、神をほめたたえる天使であります。

（西阪保治「Ⅱ 日曜世界社とその時代」p.40）

『日曜世界』の成功は、西阪を大阪に呼び戻すことになった。恩師である河辺貞吉は開拓伝道で福良教会を立て上げた人物でもあるが、西阪の始めた『日曜世界』による文書伝道を高く評価し、出版により良い環境を提供しようとしたのである⁷。恩師の支援もあって、西阪は「児童伝道と『日曜世界』の宣伝をかねて日本国中から朝鮮、台湾、満州まで」奔走するようになり、多くの協力者も参加し、1924年12月まで成長を続けるのである。⁸

2. 目次から見る、各号の特徴

ここから、青山学院所蔵の『日曜世界』各誌について、特徴などと共に概観していく。なお、本稿引用にあたっては、旧字体・旧かなづかいをそれぞれ新字体・新かなづかいを用いて表記している。

第3巻1号（1909年1月号）「クリスマス号」



写真 1.
『日曜世界 コドモノトモ』
第3巻第1号 表紙
青山学院資料センター蔵。

本号は、2カ所に所在が確認でき、青山学院と大阪府立図書館国際児童文学館が所蔵している。

「本号に限り一部八銭郵税一銭」とあり、クリスマスの特号であったことがわかる。「郵税」は、現在の送料の意味と捉えてよいだろう。印刷日・出版日の厳密さは見られず、発行日も「毎月一回二十五日発行」とうたいながら、「一二月一五日発行」と並んで記されている。この時点での編集兼発行人は、依然として支援者であった河辺貞吉の名前であり、これがどの時点で西阪に変わるのかは、今後の研究で明らかにしなくてはならない点である。

西阪は、ペンネームとして「鬍髯」を使っているが、その表記は「どくろ」「西阪どくろ」など、一定しない。このペンネームについては、上笙一郎が伝え聞いた話として、イエスが十字架刑にかけられた、「ゴルゴダの丘」に由来するという。⁹目次と本文中の表記の不一致は、他の作家やその作品についても見られるものであり、その後の発刊においても一定しない。

冒頭の写真頁は、愛読者間のつながりが感じられ、前述の西阪の回想にあるように、そのつながりが当時の満州に及んでいたことが確認できる。また、本誌には子供用の賛美歌《クリスマス》が、数字譜付きで掲載されている（本稿3-1参照）。当時は、五線紙よりも数字譜の方が普及していたことは、一般的によく知られている。子供用賛美歌『ゆきびら』からの引用だが、後には『日曜世界』オリジナルの賛美歌が掲載されるようになる。

また、チラシ時代からの「懸賞付き考え物」（懸賞付きクイズ）も掲載されている。末尾には日曜学校研究会編纂「万国日曜学課準拠 日曜の糧 四十三年度」が赤い内表紙と新しい頁番号が振られて、掲載されている。付録のような扱いであったと考えられる。

第6巻4号（1913年4月号）＊青山学院のみ所蔵。



写真2.
『日曜世界 コドモノトモ』
第6巻第4号 表紙
青山学院資料センター蔵。

本誌の「編集兼発行人」が河辺貞吉から西阪保治に、印刷人が西阪ヨシ¹⁰となっていることから、河辺貞吉のネームバリューがはずれてもよいほどに、本誌が独立した歩みができていたことがうかがえる。第3巻から3年がたって、値段が通常の値段3銭から五銭に値上がりしている。また、末尾に附録のようにあった「日曜の糧」が本文から通して頁番号を付けられて一体化し、編集も日曜世界社編集局が担当するようになっている。これについても、どのあたりからなのか、確認しなくてはいけない部分である。

また、表紙に「と」と落款印があるが、これは保阪によると第4巻あたりから担当し始めた齋藤敏夫である。それまでは、西阪が表紙を作成していたという。¹¹齋藤は本号に「入社の際」を写真付きで載せており、後に牧師として立つ齋藤が、一時期正式に記者として日曜世界社に入社していたことがわかるのである（p.18）。

また、一記者「五年間」は、『日曜世界』の5年間の歩みを記したエッセーである。そこには、日曜世界は何のために生れてきたか、という問いかけに「『日曜世界は』この〔クリスマス物語に象徴される〕牧場の羊と牧羊者にとに遣わされたのであります。『日曜世界』は小さい天使であります」（p.21）と宣言する。文中には、『日曜世界』をきっかけに始まった日曜学校の話などの実績、「『日曜世界』の発行部数は今や我国の基督教雑誌界に於て最高の位置を占めて居ります。」（p.23）など発行部数に言及する部分も見られる。この「五年間」は単発物ではなく、次号からも引き続き「日曜世界の第一巻第一号からの歴史を書く」（p.23）という。

3巻1号でもあったが、記事には西阪の講演記録が掲載されている。読者にとっては、このような記事は西阪の「動静」を単に知るという意味以上に、各地の同信とのつながりや、紀行文としての楽しみなども提供していたと思われる。それ程に、西阪の筆致は生き生きとして、当時のキリスト教会のつながりや、伝道の射程の広さを伝えるのに十分な力を持つものである。

本号にも子供用賛美歌、白兵《エス〔イエス〕の兵》が数字楽譜付きで掲載されている（本稿3-2参照）。また、懸賞には「懸賞英語聖句の和訳」とあり、ここの頁は左から右へと日本語も書かれている（p.14）。他に、たくさんの日曜学校支援グッズ、中でもカードの存在が広告頁から確認できる。おそらく、このようなものが当時は他になく、ニーズがあったのだろう。また、定期購読についての欄では料金設定がわかるが、海外の読者への料金設定「外国行（1ヶ年分）」もあり、満州はじめ東アジア地域に送られていたことがここから推測できる（裏表紙裏）。

第7巻5号（1914年5月号）＊青山学院のみ所蔵。



写真3.
『日曜世界 コドモノトモ』
第7巻第5号 表紙
青山学院資料センター蔵。

表紙裏から西阪の台湾出張「台湾より」と、台湾での講演日程の一覧が掲載されている。本号では、「目次」が整理され、『日曜世界』が「表紙と口絵」「記事」の2つの柱をもって構成されていることがはっきりと分かるようになっている。さらに各項目の下に頁数が付けられるようになった。目次に各項目の頁数が付されているのは当たり前のことではあるが、『日曜世界』は原稿の組み方の決定が遅かったのか、初期のものには載っていなかった。また、印刷所が昨年までの龍文館から三交堂になっており、いずれもどの時点から変わったのかは確認する必要があるだろう。

冒頭に掲載されている「たね蒔」（pp.2～3）は、目次に載っていない。作者名の記載もないまま頁番号が付いており、ギリギリで入れられたものであるのか、単なる目次の掲載ミスなのか、今となっては不明である。

本号では、「台湾」が一つのテーマと思われる。例えば「台湾児童の綴方成績」では、台湾児童の作文「孝行」が掲載され、台湾の学校教育では教科書が談話体（口語体）であること、そのため、表記が内地と違うという説明が付されている（p.24）。ここで目を引くのは、綴り方の挿絵（写真）である。台湾の少数民族とおぼしき民族衣装姿の人々の写真であり、これについては西阪が現地で撮影した物かどうかは不明だが、かなり先入観や読者の想像を踏まえて選ばれた写真なのではないか。

「日曜学校児童用 聖書辞解」は、聖書に出てくる植物や事柄の辞書項目である。(ルカ伝の部)とあり、「日曜の糧」が「ルカによる福音書」の「放蕩息子」のたとえ話をテキストにしていることから、この辞書項目が「日曜の糧」に対応しているものであることがわかる。

また「懸賞」は「考え物」とは別に、「日本全国 日曜学校 児童成績通信試験大会」として、優秀者証書と賞品を与えるとの募集記事が掲載されている。これは、「我国日曜学校児童諸君は現在聖書に対する知識をどれ程もっているか」を試験して計り、「日曜学校児童諸君が益々聖書に対する興味と知識を増進させられるよう、-中略- いっそう神に近づくものとなれん事を奨励する」目的で行われた(裏表紙裏)。

なお、本誌には「新詩」の紹介はあるが、賛美歌としての掲載はない。

第9巻3号(1916年3月号)*青山学院のみ所蔵。「第8巻」は誤り。



写真4.
『日曜世界 コドモノトモ』
第9巻第3号 表紙
青山学院資料センター蔵。

本号は、表紙に「第八巻第三号」の表記があるが、これは「第九巻第三号」誤りである。裏表紙・目次・書誌事項も「第九巻」とあるにもかかわらず、また第八巻になって三号を数えるに至ってもなお、なぜこのような誤植が起こったのか、原因はわからない。さらに、本号では、目次と本文の間で、作者名の表記が違っているものが多いことが特に目立つ。次章の目次のところで、()で示しているものが表記のズレがあるものである。表紙の巻番号の誤植と共通する原因があるのかもしれない。「編修室より」には、「本誌は独立経営後第三回の発行であります」とあることから、第九巻より自由メソヂスト教団の直接的(金銭的)支援から離れたことがわかる。日曜世界社の所在である発行所住所がそれまでの日本橋から天王寺になっているなど、この1年の間に比較的大きな変化があったことが考えられる。

目次にあった頁番号は再び無くなっており、内容の概観はわかるが、目当ての記事に行くまでに、頁を順に繰っていかねばならないようになっている。

表紙裏の日曜世界社の広告欄には『コドモの歌』が上がっている。日曜世界社の手による初期の子供用賛美歌集について上笙一郎の論稿では、『聖書唱歌』(1918年)や、あるいは「近代日本最初の〈公的な子ども讃美歌集〉」として『日曜学校唱歌集』(1919年)をあげている¹²が、その前にこの『コドモの歌』(1916年?)があったことになる。さらにこの広告文には、本書の附録として「台湾朝鮮支那語の讃美歌もあります。」との説明があり、大陸方面の子供の賛美歌が収録されていた

ことがわかる。

内表紙には「三月」の下に“MARCH”とあり、その下にローマ字 KADO NO OGAWA（かどのおがわ）という歌詞が掲載されている。本誌がローマ字教育にも関心をもって取り組んでいたことがうかがえる。

「告白 私は救われたでしょうか」は、若き由不康による。本誌の功績として、上笙一郎は子供賛美歌の編纂をあげるが、その一翼を担ったのが由木である。¹³その中で由木は、「愛する皆様、私も皆様と同じく日曜学校の生徒であります」と自己紹介し、証を載せている（p.32）。

今月の懸賞は、「マタイ伝第五章と第六章を何分何秒で読めますか」といったもので、単に速さを競うのではなく、自分で計ってみて、全体の平均値をあてる、という一ひねり加えられたものである（p.30）。本号の掲載賛美歌は《星の彼方》という新作賛美歌である（p.19）。こちらも、数字楽譜とおそらく齋藤敏夫によると思われる挿絵が付けられている。

さらに本号で特筆すべきは、「日曜の糧」としてまとまってあった欄がなくなり、その代わりに、「日曜講話」と題して各日曜日ごとに1頁にまとめられ、それぞれが本誌中に分散して掲載されるようになっていることだ。記載されていた、各日曜日の日付も無くなっている。

第10巻5号（1917年5月号）＊青山学院のみ所蔵。



写真5.
『日曜世界 コドモノトモ』
第10巻第5号 表紙
青山学院資料センター蔵。

本号では目次が一本化され、記事の重要度において見出しの大きさが変化されている以外は、構成のセクション分けが見分けにくくなっている。また、頁の横に振られていた頁番号が下に移っている。

九巻三号にあった「日曜講話」は、ここでは「黒板画 使用日曜講話」と項目が変わっており、日曜学校の教材として黒板に絵を描き、それを元に授業を行える形になっている。また、賛美歌として由木康による2つの賛美歌が紹介されている。一つは口語詩の《ザーカイの歌》で、五線譜が付いている。もう一つは、ローマ字による「花の日（子供の日）」の歌《HANA MOROTOMO NI》である。その横には「今度ローマ字聖句入のカードが大小数種出来いたしました。」（p.20）とあり、ローマ字教育への関心が続いていることがわかる。本号ではさらに、「ABC 英語単語の教え C CHILDREN」として、西阪がCHILDREN = 子供にちなんだ様々な聖書の短い話を掲載している。

また、「子供の歌」（『コドモの歌』？）について、「お

待ち兼の本譜付き子供の歌は本譜の活字がよいよ米国から着きました」(同前)とあり、東京音楽学校出身で、同志社で教鞭をとっていた田中寅之助の支援を受けることが記されている。

広告からは、日曜世界社の販売する出版物や雑貨がかなり増え、特に日曜学校運営を支えるものがよく見られる。10年を迎え、「創刊十周年記念 新購読者勧誘 百人運動」が大々的に展開している。

第10巻9号(1917年5月号) *青山学院のみ所蔵。



写真6.
『日曜世界 コドモノトモ』
第10巻第9号 表紙
青山学院資料センター蔵。

本号では定価が値上がりしており、六銭となっている。表紙は齋藤に変わって、鈴木一夫が担当。末尾にあった書誌項目が、表紙裏に移動している。同じ頁には「創刊十周年記念 新購読者勧誘 百人運動」が大きく告知され、第五回の入場人数が目標の500人に12人届かなかったことをもって檄を飛ばしている。

広告頁には予告として『聖書唱歌』とあり、ここでも子供向けの賛美歌の出版が計画されていたことがわかる。この『聖書唱歌』は由木康が作詞を、津川主一、大中寅二らが曲を担当して創られたものであり、1918年に出版された。¹⁴

表紙には、大きな口を開けて笑う男児と顔とローマ字で伝道の書の一節「泣くに時あり、笑うに時あり -以下略-」がローマ字で記載されている。本号の特徴は、口絵写真にもあるが、夏季学校の報告である。日本日曜学校協会大阪支部の夏季学校の様子や、感想などが掲載されている。この感想は、1頁にまとめて書かれるのではなく、各頁に「その一」「その二」と分散して「その四」

まである。また、「編修室漫画」と題した漫画(コマ無し)があるが、こちらが本号に掲載しているのは「其五」「其六」「其七」の3枚であり、誰によるもので、いつからどのような経緯で始まったのかは、今後確認する必要がある。

「黑板画使用日曜講話」は、「日曜教話」となり、同じく黑板画を教材とする形式が引き継がれ、掲載されている。また、懸賞は編集対個人であったものが、「県別対抗」も兼ねた形に拡大しており、正解者数を県別で得点化している。これもまた、日曜世界を媒介として、協力させたり競わせたりして横のつながりを感じさせ、バーチャルな関係性を夏季学校でリアルな交流へとつなげる工夫が為されている。

3. 各号の目次と掲載数字楽譜から興した五線譜

3-1. 各号目次

第3巻第1号 1909（明治42）年 12月号

明治四十二年		十二月十五日発行		二十五日発行		第三巻第一号		本号に限り一部八銭郵税一銭	
		クリスマス号							
		日曜世界社		発行所：大阪日本橋		日曜世界社			
						編集兼発行人：河邊貞吉		印刷人：西阪保治	
								印刷所：龍文館	
		総頁数（表紙+写真4+目次2+本編32+日曜の糧10+広告2+裏表紙裏（日曜学校／書誌項目含）+裏表紙）						53	
		（表紙）				コバイ		頁数	
		（カット・挿絵）				ー			
◎口絵	〔写真〕	クリスマス＋ルカ二章十五節-十六節		〔聖家族の絵〕		作者不明		0-1	
	〔写真〕	路傍の日曜学校一本誌愛読者会 「淡路島津名郡豊島村に於て」 「満州奉天公園に於て」						0-3	
	〔写真〕	本誌の愛読者：五枚（六）名分						0-5	
目次	目次	構成：口絵（写真）＋記事（本編）＋附録（日曜の糧明治四十三年一月分）						0-7	
	〔お知らせ〕	構成：全国の教会関係者のクリスマスと新年の挨拶、次号の予告						0-8	
◎記事	〔内表紙〕	クリスマスと天使祝賀		〔馬小屋の聖母子像〕		作者不明		1	
	〔物語〕	「武雄と美代子ちゃんはどうしてクリスマスを迎えたか」				どくろ		2～6	
	〔賛美歌〕	《クリスマス》				詞：けいすい〔不明〕 曲：ゆきびら第六十三の譜		7	
	エバナシ	タイトル無し				どくろ		8	
	〔講話〕	「少年時代のイエスはどのようなお方であったか」				日本メソヂスト総務局幹事 三戸吉太郎		9～11	
	〔講話〕	「恐るべき火刑にあって尚信仰を捨てざりし感ずべき少年」				基督教新聞主筆 三谷種吉		12～14	
	〔エッセー〕	「クリスマスは何処から来る？」				けいすい		14	
	〔講話〕	「吾身を売ってクリスマスに献金せし感ずべき奴隷の少女」				御牧碩太郎		15	
	〔講話〕	「可愛い贈り物」				神愛幼稚園主 蔵田のぶ子		16～19	
	〔講話〕	「徳川時代に殉教したる橋本太兵衛親子の美談」				浜田教会牧師 八濱徳三郎		20～21	
	〔挨拶〕	「謹てクリスマス 新年を賀す」				日曜世界社同人		21	
	〔エッセー〕	「聖地々誌（一）ベツレヘム」				大屋左一		22	
	〔物語〕	「日本魂（一）僕は日本人だよ」				月の家主人		23～24	
	〔報告〕	「十年間一日も欠席せざりし感ずべき日曜学校生徒				一記者		25	
	〔クイズ〕	懸賞考え物新題		〔懸賞付きクイズ〕				25	
	〔詩〕	「僕の母ア様」				柴田はつ子		26～27	
	〔読者ページ〕	シタシミ（証言と感話）（感謝と求禱）（求交）（前号所載）（俳句）（お願い）（お尋ね）（さまざま）（欄外より）◎前号考え物解答：クリスマス						28～31	
◎附録	〔紀行文〕	「阿波みやげ（次は東京みやげ）」				欄外		32	
	〔内表紙〕	「万国日曜学課準拠 日曜の糧 四十三年度」				日曜学校研究会編集		附0	
		「明治四十三年 一期 一月分」		マタイ三章一節・十二節				附1～2	
		その一 イエスの先駆け（バプテスマのヨハネ）		マタイ三章十三節・十七節				附3～4	
		「その二 イエスのバプテスマと野の試誘 九日」		マタイ四章一節・十一節					
		「その三 ガリラヤ伝道の始 十六日」		マタイ四章十二節・二十五節				附4～5	
		「その四 幸福 二十三日」		マタイ五章一節・十六節				附6～7	
		「その五 王国の憲法 三十日」		マタイ五章十七節・二十六節 三十八節・四十八				附7～8	
	〔広告〕	○野木洋反物店						ー	
		○ライオン歯磨							
	〔広告〕	○ブル女学校 生徒募集				○ブル女学校		ー	
		○日曜世界無料購読券				○大阪日本橋 日曜世界社調達部			
		第一種 十銭（三ヵ月分）							
		第二種 二十銭（六ヵ月分）							
		第三種 四十銭（一ヶ年分）							
裏表紙裏		「出席証明状」「日曜学校出席表」							
		「書誌項目」							
裏表紙	裏表紙	三谷種吉「宇伊波實歴談」基督教新聞社							
	〔広告〕								

142 児童雑誌『日曜世界 コドモノトモ』へのアプローチ

第6巻第4号 1913 (大正2) 年 4月号

大正二年 三月二十五日発行 第六巻第四号

一部五銭

日曜世界社 発行所：大阪日本橋 日曜世界社

編集兼発行人：西阪保治 印刷所：西阪ヨシ 印刷所：龍文館

総頁数 (表紙+表紙裏：広告+広告1+目次2+広告1+口絵1+写真3+本編40(含日曜の糧6)+広告4+裏表紙裏 (日曜学校／書誌項目含)+裏表紙) 56

	(表紙)	斎藤敏夫	頁数
	(カット・挿絵)	不明	
[広告]	「各地における日曜学校のおあつまり」	「日本日曜学校協会大会」「少年少女共働大会」	0-1
[広告]	「復活節・子供の日・花の日等の日曜学校賞品に最適」	「日曜学校生徒総合大会」「日曜学校特別大会」「児童大伝道会」	0-2
目次	目次	構成：表紙と口絵(写真)+記事(本編)	0-3~4
	[広告]	「カード帖としをカード」	
◎口絵	口絵	「ヨセフ売らる」	0-5
	写真画報	「英国における天幕伝道」	0-6
	口絵	「横浜市各派日曜学校総合大会 散会の風景」	
	写真画報	「新島襄先生の墓前に於ける愛読者の集合」	0-7
		「鎌倉賞に保育園の姉妹」	0-8
◎記事	[内表紙]	斎藤敏夫?	1
	[物語]	「朝」	2~10
	[賛美歌]	《エス〔イエス〕の兵》	11
	えばなし	「ヒバリ」	12~13
	[クイズ]	懸賞英語聖句の和訳 第二回問題	14
	子供の声	「家拝」	14
	[物語]	「印度勇婦 バンジタ、ランバイ 四」	15~18
	[紹介]	「入社と辞と歓迎の辞」	18
	[物語]	「夢」	19~20
	[エッセー]	「五年間」	21~23
	[報告]	「東西南北」	23
	[読物]	「少年少女 旧約物語 (四)」	25~26
	[紀行文]	「急ぎ旅 (一)」	27~30
	[クイズ]	懸賞 字さがし 新題	31
	[交流]	「兄弟姉妹館」	32~34
		読者と記者、読者と読者、前号所感、感謝と求禱、記者より、投書家みなさんに	
	[お知らせ]	「再び東京へ 此次は山陰道へ」	34
	[日曜の糧]	「万国日曜学課準備 日曜の糧」	35
		「大正二年 第二期 四月分 その一 ヤコブとエサウ」 六日	35~36
		「その二 ベテルに於けるヤコブ 十三日」	36~37
		「その三 ヤコブとエサウとの会合 二十日」	37~38
		「その四 ヨセフ、エジプトに売らる 二十七日」	38~40
	[予告]	五月の学課	40
	[広告]	○日曜世界社 スタンプカード	—
		○ライオン歯磨	—
	[広告]	日曜学校に関する各種カード	—
		「日曜学校 入学申込用紙」「報告用紙」	—
	[広告]	○ブール女学校 生徒募集	—
		○小波著／夢二画『お伽パラダイス』	—
裏表紙裏	裏表紙裏	「純銀製七貫入 留針(ピン) 無代進呈」	—
	[広告]	「日曜学校満五周年 記念絵はがき 無代進呈」	—
		「書誌項目」	—
		第一冊(一ヵ月分) 前金郵税共五銭五厘	—
		第六冊(六ヵ月分) 前金郵税共五銭五厘三	—
裏表紙		「できました、純日本式のカード」	—
	[広告]	日曜学校用 恩物カード 花たば」	—
裏表紙			—

第7巻第5号 1914（大正3）年 5月号

大正三年 四月二十日発行 第七巻第五号

一部五銭

日曜世界社 発行所：大阪日本橋 日曜世界社

編集兼発行人：西阪保治 印刷人：西阪ヨシ 印刷所：三交堂

総頁数（表紙+表紙裏+告知1+目次2+広告1+口絵1+写真2+本編40(含日曜の種5)+広告4+裏表紙裏（告知）+裏表紙） 55

			頁数
◎表紙	（表紙）「花の日 一石版色刷」	斎藤敏夫	
	（カット・挿絵）	—	
〔告知〕	「台湾より」	どくろ	0-1~2
	「講演日程」		
目次	目次	構成：表紙と口絵（写真）+記事（本編）	0-3~4
	〔広告〕	「カード帖と敏夫カード」	0-5
◎口絵	口絵（写真版）「失いし金」 ルカ十五章	〔聖画〕	作者不明
◎口絵	（絵・写真）「花売り娘」		作者不明
	写真画報 「書齋に於けるポータ女史」		
		「千葉日曜学校の模範生」	どくろ撮影
	〔内表紙〕		作者不明
	〔絵話〕	「たね蒔き」	作者不明
	〔物語〕	「有名な画家の話」（前号のつづき）	斎藤敏夫
	〔劇台本〕	「エデンの花園」	岩村清泉
	〔物語〕	「仲直り」（前号のつづき）	孤村生
	〔川柳〕		どくろ
	〔手紙〕	「アイ、ビー、クレイトンより」	
新詩	「日々の曲」		牧葉
	〔物語〕	「黄金の尺」（前号のつづき）	舞蘭
	〔講話〕	「呪の花」	どくろ
	〔読者〕	「台湾児童の綴方成績」	
		台南第一公学校 蕭天旺「孝行」	
	〔物語〕	「母の一言」（前号のつづき）	きぶろう
	〔物語〕	「ユダヤの学者 アキバ」	ミツクル
〔クイズ〕	懸賞 考え物 新題	〔懸賞付きクイズ〕	
	〔講話〕	「ベンテコステ」	大屋生
〔日曜の種〕	「万国日曜学課準提 日曜の種」		日曜世界社編集局編纂
	「大正三年 第二期 四月分」	ルカ第十五章十一—三十二節	
	その五 放蕩息子 三日」		
	「その六 不義なる操会者 十日」	ルカ第十六章十一—十三節	
	「その七 富める人ラザロ 十七日」	ルカ第十六章十四—十五節	
		十九—三十一	
	「その八 無益なる僕 二十四日」	ルカ第十七章一—十節	
	「その九 恩を忘れざるサマリヤ人 三十一日」	ルカ第十七章十一—十九節	
〔参考〕	「日曜学校児童用 聖書辞解」（ルカ伝の部）		
〔交流〕	「編集室より」		どくろ
〔広告〕	イースターの最高のプレゼント		
	『聖書昔話』		
〔広告〕	日曜学校に関する各種カード		日曜世界社
	「旧約聖書 歴史カード（創世記の部）」		
	「出席奨励 教材併用 花カード」		
〔広告〕	日曜学校備品の手引き		
	「日曜学校入学申込用紙」「歓迎カード」「報告用紙」「訪問カード」「カード帖」ほか		
〔広告〕	○ブル女学校 生徒募集		○ブル女学校
	○ライオン歯磨		○ライオン歯磨
	○「書誌項目」〔広告料など含む〕		○日曜世界社
裏表紙裏	裏表紙裏		
〔告知〕	「日本全国 日曜学校 児童成績通信試験大会」		日曜世界社
裏表紙	裏表紙		
〔広告〕	○西阪どくろ著／斎藤としを画『日曜学校 絵物語』		○日曜世界社
	○「基督御一代カード」（教授細目録添付）		

144 児童雑誌『日曜世界 コドモノトモ』へのアプローチ

第9巻第3号 1916（大正5）年 3月号 （第8巻は誤り）

大正五年 二月二十五日発行 第九巻第三号

一部五銭

日曜世界社 発行所：大阪市天王寺 日曜世界社

編集兼発行人：西阪保治 印刷人：西阪ヨシ 印刷所：三交堂

総頁数（表紙+目次2+広告 1 +口絵1+本編35+広告5（折込添付含む）+裏表紙裏+裏表紙）

47

				頁数
◎表紙		（表紙）「マドンナ」 （カット・挿絵）	秦四名 —	
目次	目次	構成：表紙と口絵（写真）+記事（本編）		0-1～2
	〔広告〕	『コドモの歌』 シャーウッド女史『鬼ガ森』 『聖書昔話』		0-3
◎口絵	口絵（写真版）	「ステパノの殉教」 ルカ十五章	〔聖画〕 作者不明	0-4
◎口絵	〔絵・写真〕	「基督画伝（其八） ペテスダ」	作者不明	0-5
	〔内表紙〕	≪KADO NO OGAWA≫	〔歌詞〕 作者不明	1
	〔講話〕	「宙返り飛行家 ナイルス氏が青年に与えたる警告」	近江八幡 ヴオリズ	2
	絵話	絵話	斉藤俊夫	4～5
	〔講話〕	「日曜学校上級生に対する余の希望」	釘宮辰生	6～8
	宗教小説	「二葉」	末長緑葉	9～14
	日曜講話	「ステパノの死」	編集部	15
	〔賛美歌〕	≪星の彼方≫ （新作さんびか）	詞：のぞみ 曲：F.J.Crosby	16
	最近事実	「潜航艇！！」	瘦笛子（大村瘦笛）	17～19
	〔講話〕	「連合軍の兵士に代わりて」	土佐まさを（土佐正行）	20
	〔物語〕	「雲雀」	青像（米山清象）	21～24
	〔紀行〕	「九州より」	西阪鬨腰	21～24
	日曜講話	「信仰の英雄及び殉教者」	編集部	25
	〔物語〕	「狼と笛」	愛笛子	26
	〔物語〕	「ソロモン王の名裁判」	宇津木如雪	27～29
	〔告知〕	「次号の読み物」	編集部	29
	〔小話〕	「笑話」	作者不明	29
	〔紀行〕	（二十四頁よりつづく）〔「九州より」つづき〕	西阪鬨腰	30
	〔懸賞〕	「マタイ伝第五章と第六章を何分何秒で読めますか〔懸賞付き読本〕		30
	日曜講話	「ビリボとエチオピア人」	編集部	31
	告白	「私は救われたでしょうか」	由木康	32～34
	〔交流〕	「編集室より」 「感謝の涙」「主筆の活動」 「日曜学校教職員表彰会」「本誌同情者及読者の	編集部	35
	〔広告〕	日曜学校備品の手引き 「日曜学校 入学申込用紙」「歓迎カード」「報告用紙」「訪問カード」「カード帖」ほか		—
	〔折込添付〕	「日曜学校カード帖」 裏には、子供の絵		裏表
	〔広告〕	〔各種カードやグッズ、出版物、教案など〕 『幼稚科教案』『初等科教案』『中等科教案』 『基督画伝』		—
	〔広告〕	○ブル女学校 生徒募集 ○ライオン歯磨 ○「書誌項目」〔広告料など含む〕 ○「景品付記念特売当選発表表」 ○「近刊カード予告」 ○「基督伝カード」	○ブル女学校 ○ライオン歯磨 ○日曜世界社	—
裏表紙裏	〔告知〕			—
裏表紙	裏表紙 〔広告〕		○日曜世界社	—

第10巻第5号 1917（大正6）年 5月号

大正六年 四月二十五日発行 四月二十日印刷 第十巻第五号

一部五銭

日曜世界社 発行所：大阪市天王寺 日曜世界社

編集兼発行人：西阪保治 印刷人：西阪ヨシ 印刷所：三交堂

総頁数（表紙+表紙裏+広告1+目次2+広告1+本編38+広告2+裏表紙裏（告知）+裏表紙）

48

				頁数
◎表紙	表紙	（表紙）「春の海」	齋藤敏夫	
		（カット・挿絵）	—	
	〔広告〕	「日曜学校 カアド」	日曜世界社	0-1
		「敏夫カード」		
	〔広告〕	「上級生用 日曜学校手帳」「日曜の友 カード カバン」「日曜学校教師手帳」ほか	日曜世界社	0-2
目次	目次			0-3~4
		〔広告〕	『一食一言』 シャウッド女史『鬼ガ森』 『聖書昔話』	0-5
◎口絵	〔内表紙〕	「聖地絵はがき便 第四信」 ルカ十五章	〔聖画〕 雄（はるな）	1
◎口絵	エバナシ	「ビリボと静恵さん」	齋藤敏夫作／画	2~5
	口語詩	«ザアカイの歌»	〔歌詞〕 由木康	6~7
	通信	「南洋より」	木村清松	8~9
	〔物語〕	「我国最初の基督教々師 小川義経〔ヨシヤス〕（承前）」	西阪どくろ	10~15
	感話集	「聖書を買うなら」「ドイツの子供」		15
	〔教材〕	「真の葡萄樹」（黒板画使用日曜講話）五月十三日	編集部	16
	おとぎばなし	「薔薇子」	西阪どくろ	17~20
	〔報告〕	「編集室より」		17~20
	〔賛美歌〕	«Hana Morotomo Ni»（ローマ字花の日の歌）	由木康	21
	〔教材〕	「節に謹め」（黒板画使用日曜講話）五月二十日	編集部	22
	〔物語〕	「長編少年物語 二勇少年（八）」	マリーイーローブス作 廣田花崖訳	23~26
少女美談		「機関士の娘」	西阪どくろ	27~29
	〔交流〕	「兄弟姉妹館」		27~29
		「読者と記者」「前号の所感」「読者の動静」		
	〔教材〕	「聖霊と其働き」（黒板画使用日曜講話）五月二十七日	編集部	30
	〔英語〕	「ABC 聖書単語の教え C Children」	西阪どくろ	31~34
劇歌		「三つの胡蝶」	新阿繁子	
	〔勧誘〕	「奇抜なる 百人運動 次号発表」		34
	〔教材〕	「主裏切られ捕縛され給う」（黒板画使用日曜講話）六月三日	編集部	38
	〔広告〕	「日曜学校備品の参考書や教材」		—
	〔広告〕	○プール女学校 生徒募集 ○ライオンはみがき ○「書誌項目」（広告料など含む） 「前号考え物解答」「次号取組」「県別点取表」 「懸賞考え物新題」	○プール女学校 ○小林富次郎 ○日曜世界社	—
裏表紙裏	裏表紙裏			—
裏表紙	裏表紙	○「ローマ字金言入花カード」	○日曜世界社	—
	〔広告〕			

第10巻第9号 1917 (大正6) 年 9月号

大正六年 九月一日発行 九月二十日印刷 第十巻第九号

定価六銭

日曜世界社 発行所：大阪市天王寺 日曜世界社

編集兼発行人：西阪保治 印刷人：西阪ヨシ 印刷所：三交堂

総頁数（表紙+表紙裏+広告 1 + 目次2+広告1+口絵2+広告1+ + 広告2+付録2+本編35+広告3+裏表紙裏（広告）+裏表紙） 53

				頁数
◎表紙	表紙	（表紙）「あさかお」	鈴木一夫	
		（カット・挿絵）	—	
	〔広告〕	「創刊十周年記念 新購買者勧誘 百人運動」	日曜世界社	0-1
	〔広告〕	「書誌項目」		
目次	目次	「日曜学校 カアド帖」	日曜世界社	0-2
		「日曜学校 生徒手帳」「日曜学校 教師手帳」		
	〔広告〕	「日曜学校 発起日」	日曜世界社	0-3~4
		「発起日案内はかき」「発起日胸章」		
口絵（写真版）		「歓迎カード」ほか		
		「大阪部会第二回少年少女夏季学校写真（其一）」		0-6
		「大阪部会第二回少年少女夏季学校写真（其2）」		0-7
	〔広告〕	「敏夫カード」	日曜世界社	0-8
近刊予告		「豆カード」「賛美カード」		
		「聖書唱歌」「聖書かるた」「金言絵解柱かけ」	日曜世界社	0-9
		「日曜学校百話」ほか		
	（付録）	日曜世界社の出版物		
注文書／振込書				
〔内表紙〕		「顔」「ローマ字聖句：伝道の書」		1
	エバナシ	「二話の秋草」	齋藤敏夫作／画	2~5
	口語詩	《マルタとマリア》	〔歌詞〕 松澤兼人	6~7
	〔投稿？〕	「梅りによりて」	徳永つぎ	6~7
〔報告〕		「第二回大阪少年少女夏季学校」	N記者〔西阪？〕	8
	夏季学校講演	「天と創造者」	釘宮辰生	9~13
	夏季学校感想	「その一」「その二」「その三」	愛読者	10,12,13
	〔クイズ〕	懸賞 考え物 新題	〔懸賞付きクイズ〕	13
〔当選者発表〕		「記念メダル 贈呈者氏名（第一回発表）」		13
	〔交流〕	「兄弟姉妹館」	愛読者	14~17
	おとぎばなし	「獅子の口を通れた兄弟狐」	西阪どくろ	14~17
	—	「聖書に因んだ人名地名商品名、営業名（二）」		17
〔教材〕		「日曜教話 絶対禁酒の利益」	編集部	18
	新作唱歌	《ほたる草》	友野三恵	19
	〔教材〕	「日曜教話 燃ゆる炉」	編集部	20
	〔物語〕	「英国現内閣総理大臣 ロイド、ジョージ」	米山清三	21~25
〔教材〕		「日曜教話 獅子の窟」	編集部	26
	少女物語	「二人の天使（完）」	由木康	27~31
	夏季学校感想	「その四」	愛読者	31
	〔教材〕	「苦は楽の種」	編集部	32
〔交流〕		「編集室より」	編集部	33
	〔挿絵〕	「編集室漫画（其五）」		33
	〔挿絵〕	「編集室漫画（其六）」		34
	〔挿絵〕	「編集室漫画（其七）」		35
〔広告〕		「前号考え物解答」「県別点取表」		35
		「日曜学校備品の参考書や教材」		—
	〔広告〕	○ブール女学校 生徒募集	○ブール女学校	—
		○ライオンはみがき	○小林富次郎	—
裏表紙裏	裏表紙裏	○今泉真幸『聖書読本』	○日本組合教会日曜学校部発行	—
		○直輸入品荷着御案内	○日曜世界社	—
	裏表紙	「いよいよ次号は くりすます準備中」	○日曜世界社	—
				—

3-2. 掲載数字楽譜から興した五線譜

今回は、掲載賛美歌として数字譜のもののみ、今後のアクセスを考慮し、五線譜に書き換え掲載した。¹⁵『日曜世界』の発行当初の時代は、五線譜よりも数字譜の方が一般に普及していたことはよく知られており、賛美歌も数字楽譜で書かれたものが多い。途中から数字譜に代わって五線譜が掲載されるようになる。『日曜世界』は日本人によって書かれた子供賛美歌の制作に大きな功績があると考えられることから、その事情等について、今後の研究で明らかにしていかなくてはならない。

また、チューン（Tune 旋律）名なども不明なものが多く、引用元もわからないが、当時の賛美歌集を確認すれば、ある程度は明らかになってくると考えられる。

『日曜世界』第3巻第1号 p.7 《クリスマス》 変口長調 四分の二拍子

作詞者は「けいすい」とあるが、この人物がどういった人物なのかは不明である。チューンは、クララ・エル・ブラオン（武良温クララ）編『ゆきびら 少年讃美歌集』（1901年 警醒社）63番チューン名 HARVEST SONG（収穫感謝の歌）、が用いられている。こちらの歌詞と違うことから、《クリスマス》は、新たな歌詞ではないかと推測する。『ゆきびら』での第63番は「四季の歌」に分類されており、新嘗祭用の賛美歌となっている。この歌を歌うとき、子供は、今よりもっと存在感があったであろう「新嘗祭」の様子とリンクさせてクリスマスを理解したと思われるが、新嘗祭はいわば収穫感謝祭であることから、ここにイメージのズレが生じていた可能性もあり、チューンの選曲が興味深い。

『日曜世界』第6巻第4号 p.11 《エスの兵》 ト長調 四分の二拍子

作詞者は「白兵」とあるが、この人物がどういった人物なのか、また新作の歌詞なのかは不明である。チューンもどこからの出典か、あるいは新作なのか不明である。非常に元気のある、軍歌調の旋律であるが、リズムが複雑で、この通りに歌えたかどうかは疑問が残る。

『日曜世界』第9巻第3号 p.11 《星の彼方》

新作賛美歌である。作者は「のぞみ」とあるが、この人物がどういった人物なのかは不明である。チューンは F. J. Crosby とあり、おそらく、Frances (Fanny) Jane Crosby (1820-1915) というアメリカ人の賛美歌作家で、ちょうど时期的に一致する。この賛美歌のチューンがフランシス・クロスビーによるものであれば、子供賛美歌が当時のアメリカの新しい賛美歌から選ばれていたことがわかる。チューン名が記されておらず、もとの引用などが不明であるが、このあたりも、日本に入っていた当時の他の賛美歌集を確認し、検証することが必要だろう。

クリスマス



1. け ふ は う れ し ク リ ス マ ス ー
2. う ま れ た まう た エ ス さ ま は ー

か は ゆ ら し い エ ス さ ま が
す く ひ め し よ か み の こ よ

ベ ツ レ ヘ ム の う ま ご や に
た た ヘ ま つ れ も ろ と も に

う ま れ た まう た お い は ひ び
こ ゑ の か ぎ り ほ め う た ヘ

エスの兵

1. す す め や す す め ー エ ス の へ い
 2. ち か ら や つ く せ ー エ ス の へ い
 3. お お し く あ れ や ー エ ス の へ い
 4. う た ひ め あ が め よ エ ス の へ い

た い ご ー み だ さ ず し づ し づ と
 じ う じ の み は た ー あ ぶ し づ と
 む う ら る て く だ は た ー あ け ぎ づ と
 ち か ら ー て く だ は か れ ち へ ぐ づ と
 ち か ら ー て く だ は か れ ち へ ぐ づ と

て き を ー お そ れ て す す み ゆ け
 い さ み ー は げ っ み て た た か た へ の け
 こ こ ろ は ー あ と な く き たり へ の せ よ
 て き を ー あ と な く き たり へ の せ よ

しや う り の き み は ー さ き だ て り
 しや う り の き み は ー さ き だ て り
 しや う り の き み は ー さ き だ て り

星の彼方

F. J. CROSBY

1. ね に ゆ く と り に さ そ は れ て
 2. ほ し の か な た に く そ に あ り や
 3. あ あ し ん こ う の め を あ げ て

ゆ ふ べ の そ ら を み あ ぐ れ ば
 そ ふ ら の か な た ら に ひ と あ り や
 は て な き そ た ら を あ ふ げ か し

ゆ ふ ば へ の こ る や ま の は に
 み ぶ ん ざ る く に を な ま の し み
 か し こ に か み の さ か ゑ あ り

か が や き い で し ほ し ひ と つ
 あ ま か け り ゆ く わ が お も ひ
 か し こ に か み の み い い づ あ り

4. おわりに

『日曜世界 コドモノトモ』の発刊は、1907年12月から1924年12月である。その後、1925年1月からは『基督教家庭新聞』として家庭用に、また『日曜学校こども新聞』を児童用に、『日曜学校級別教案』を日曜学校用に発刊するようになった。¹⁶これには、発行部数の拡大や、日曜学校と家庭教育との連動性など、様々な要因が考えられるだろう。

『日曜世界社』について、上笙一郎は『喜^{よろこび}の音^{おとずれ}』と比較して、次のように言う。

菊判、三十六ページの粗末なものだったが、ほとんど唯一のキリスト教児童雑誌『喜の音』が十二ページのパンフレットだったのに比べると、二色刷りの表紙を持ったマガジン形態で、立派でもあれば新鮮でもあった。それでからか、淡路島の子どもたちに歓迎されたのみならず、島の外にまで、読者が増えるようになったのである。－中略－『日曜世界』は〔日曜学校盛況の〕いきおいを支えとしてページ数を増やし、発行部数を一万部以上にまで飛躍させ、キリスト教系児童ジャーナリズムのいわば公器の位置を獲得したのである。」

（上笙一郎，前掲書，2003年4月号，pp.16-17。）

ここまで各号を見てきて、まず確認できることは、本誌が「日曜学校」を前提とし、それとの結び付きが非常に大きいと言うことである。つまり、何もない、雑誌だけの結びつきによって読者が『日曜世界』とつながっているのではない、ということだ。バーチャル（仮想的）な読者コミュニティではなく、リアル（現実）の場での交流があって成立している、読者と『日曜世界』なのである。さらに言えば、『日曜世界』は、『日曜世界』だけで機能・完結するようには出来ておらず、日曜学校への参加によって初めて完成される雑誌形態だったのである。

それがわかるのが、日曜学校の教材提案部分に相当する「日曜の糧」や「日曜講話」「日曜教話」だ。各会の聖書の箇所を明記して、勘所を示すだけでなく、口絵を連動させたり（九巻三号の口絵「ステパノの殉教」は、教材となっているルカによる福音書と同じ箇所を扱っており、そのまま使えるようになっている）、「黒板画」（10巻5号）を提示して日曜学校の教師自体が描けるようにしたりなど、お仕着せの教材ではなく、『日曜世界』のコンテンツを、それぞれの日曜学校の状況に応じてカスタマイズして活用できる工夫が随所に見られる。このあたりは、西阪の「牧師」としての経験によるところも大きいのであろう。

一方、そのような『日曜世界』のあり方は、「子供向けの本」と言いつつ、対象読者として、果たして本当に「子供むけ」であったかどうかは疑問である。『日曜世界』の、誌面だけでは完結しない（できない）内容からすると、むしろ、日曜学校教師のための部分が大きなウェートを占めていたと考えられる。例えば、先述した「日曜の糧」を起源とする一連の日曜学校教材は、明らかに子供を対象としたものではない。さらに、書かれている物語や、紀行文などは、漢字の多さや、内容から、語り口は明らかに「大人から子供へ」のものであり、子供とその背後の大人たちが想定さ

れていることがはっきりしている。子供が子供だけで読んで楽しめる内容は、それ程多くないのである。それは、『日曜世界』の読者に大人の介在を想定しているというのと同時に、日曜学校を前提とすることで、範疇に入れる年齢が幼児から青年まで幅広かった、ということにもよるのだろう。『日曜世界』がやがて、『基督教家庭新聞』『日曜学校こども新聞』『日曜学校級別教案』となったのも、そのような背景があり、それぞれを1つの雑誌に押し込める限界と、子供たちをめぐる様々な環境に個別に働きかけることで、さらなる充実が目指されたと考えられる。

他にも、『日曜世界』の功績としては「子供賛美歌」があげられる。今回は、踏み込まなかったが、これについては、さらに各号の調査が必要である。それぞれの号での新作賛美歌や用いられたチューンを解析していくことで、当時のキリスト教会の子供たちへの働きかけ、また彼らをめぐる大人たちに対して、キリスト教信仰の何を重要視し、伝えようとしてきたか、その輪郭がはっきりすると考えられるからだ。

上笙一郎は、『日曜世界』を出発点に大きく成長した「日曜世界社」を、「＜子どもへの伝道＞を目標とした日本最初の出版社と言っておそらく過言ではない」¹⁷と評する。その礎となった子供のための小さな雑誌は、世の変遷に埋もれてしまった信仰と共に、キリスト教会が対峙してきた社会の姿を雄弁に語るのである。

＜参考文献＞

- ブラオン・クララ・エル（武良温クララ）編『ゆきびら 少年讃美歌集』、警醒社、明治34年〔1901年〕。
 上笙一郎「関西児童文化史 稿・34『日曜世界』と子ども讃美歌（上）」『日本古書通信』第885号、2003年4月号、pp.16-17。
 「関西児童文化史 稿・35『日曜世界』と子ども讃美歌（下）」『日本古書通信』第888号、2003年5月号、pp.10-11。
 西阪保治「Ⅱ 日曜世界社とその時代」『日本キリスト教出版史夜話』新教出版社、1984年、pp.35-48。

『日曜世界 コドモノトモ』日曜世界社
 第3巻1号、1909（明治42）年 12月号。
 第6巻4号、1913（大正2）年 4月号
 第7巻5号、1914（大正3）年 5月号
 第9巻3号、1916（大正5）年 3月号
 第10巻5号、1916（大正6）年 5月号
 第10巻9号、1916（大正6）年 9月号

注

- 1 上笙一郎「関西児童文化史 稿・35『日曜世界』と子ども讃美歌（下）」『日本古書通信』第888号、2003年5月号、p.11。
- 2 上笙一郎「関西児童文化史 稿・34『日曜世界』と子ども讃美歌（上）」『日本古書通信』第885号、2003年4月号、p.16。

- 3 西阪保治「Ⅱ 日曜世界社とその時代」『日本キリスト教出版史夜話』新教出版社、1984年、pp.35-48。
- 4 牧師の任地の任命（任命制）は、フリーメソジストの特徴であり、現代も引き継がれている。
- 5 「生日の礼拝出席者は数名を出たことはなく - 中略 - 日曜学校にも全然子供は集まらなかった。村の青年たちのいたずら半分の礼拝妨害にもずいぶん悩まされた。 - 中略 - ほほ様子を聞いて覚悟はしていたものの、あまりの不振無活気に失望、着任二ヶ月余、私はたまりかねて大阪へ帰りたいくなった。」（西阪保治「Ⅱ 日曜世界社とその時代」 pp.37-38。）
- 6 「私は短い童話に賞品つきのクイズを添えた謄写版刷のビラを、信者の一人で役場に勤務している K 兄に頼んで作ってもらい、F さんの店〔町で唯一の新聞取次所〕に〔挟み広告として〕持ち込んだ。同時に教会の格子戸に解答紙の受け箱を取りつけた。（同前、p.38。）
- 7 「〔河辺貞吉〕先生は特に祈り、また何くれと援助を惜しまれなかった。毎月九円の補助、一人の婦人伝道者を事務の処理にかして下さった。また伝道に出張される先々で『日曜世界』を紹介し、児童の伝道者として小さい私を紹介して下さい。」（同前、p.40。）
- 8 同前、p.41。
- 9 「イエス・キリストの十字架に付けられたゴルゴダの丘、＜ゴルゴダ＞は古代ヘブライ語で＜髑髏＞を意味しており、それ故に西阪は＜髑髏＞を画号とした」（上笙一郎、前掲書、2003年4月号、p.17。）
- 10 西阪保治の妻。孫の星野正興氏によると、普段は「西阪芳」と名乗っており、ごく初期から二人三脚で日曜世界社を運営していた。ヨシは和泉（大阪）の篤農家の長女として生まれ、梅花女学院（大阪）で学んだ。保治は旧姓を「大村」といい、ヨシと神学校で共に学び、結婚の際には婿養子となって西阪姓を継ぐことになる。
- 11 「たしか四巻頃からだと思うが、齋藤敏夫（元日本基督教団堺教会牧師）が表紙に挿絵に見事な腕を揮って下さった。それは齋藤牧師がまだ神学社に学んでおられた時代のことである。なんとそれまでは私が表紙の絵を描いていたのである。」（西阪保治、前掲書、1984、p.41。）
- 12 上笙一郎、前掲書、2003年5月号、p.11。
- 13 「かくて、関西学院を主軸として由木・津川〔主一〕・大中〔寅二〕の三人は出逢ったわけだが、この様を見ていた『日曜世界』編集者の西阪は、その協力を生かす手立を考えて、子ども賛美歌集の編纂・刊行を思い立った。」（上笙一郎、前掲書2003年5月号、p.10。）
- 14 上笙一郎、前掲書、2003年5月号、p.11。
- 15 五線譜作成は、中村徹氏による。
- 16 「一九〇七年の一二月、淡路島の片隅に出生した『日曜世界』は、一九二四年の一二月をもって満一八歳に成長した。その翌年（一九二五年一月）一九歳の第一号から、『基督教家庭新聞』と名前を変え、基督教教育の分野を日曜学校から家庭に拡大し、一方児童のために『日曜学校子供新聞』を併刊し、また日曜学校教師のために、すでに一年四回定期的に刊行していた『日曜学校級別教案』をいっそう充実することに切り変えた。」（西阪、前掲書、1984年、p.41。）
- 17 上笙一郎、前掲書、2003年4月号、p.16。